



石堂丸苧萱物語

二

~ 13
3113
2





加藤新左衛門藤光の事

加藤新左衛門藤光の事。そのいもふも主君の勤當と稟承領
 も汲ぬせられし。慙愧憤激し。毒の柱江み縁由死説
 ありせ。てしあやう。これ不肖あるとも祖父の箕裘を嗣
 射藝のりし君。不仕りから。とうふも不慮の難義。小係
 了く家声をおとさる。是非小及されとる。後なり。はれよ
 う。くぬ。び藝術を煇煉し。遂小鈴と射おと。後
 栄成く。これ。心身もあはれ。こと。本國筑前宮崎
 乃石堂に小立せ。み地藏并。靈驗尤世小掲焉。
 祖父藤系氏入道。この菩薩の祈子。ふして。父の氏助も亦





み對しきその憚りにはあはれまされよ紀ふさうんとして名越の
切通ふさうまのり家次りとして。桂江母子と佳し。衣食あるふ
それのさましくぬきふむつんとて。町寧ふ業し。後ふ藤光
とみく安堵して。政景ふよるとい。ゆえ妻子は別し。遠く
筑紫へ旅し。たれれば。加藤新九浦門藤光の夜小宿に
日ふ歩し。ゆけく。筑前國宝満山の麓ふ到りぬ。この山一名
穴竈門山といふ山の頂ふ宝満院あり。是則加藤藤光石室
丸と呼ぶ。と海八箇年勤孝の精舎あり。教代の檀越な
り。ふ。聴く彼山小登り。仕持ふ對面し。審ふさうん

と物さうて寄宿次りのこす。す。住持一議あり。及む。未
く。客殿の側ふ空房ありし。をわたり。七。藤光代位
所と定め。公らまら。扶助せられり。あはれも。藤光へ道場
ふ。於て。武藝の誓古せん。を憚り。日毎ふ弓矢と携
り。寺門をもち出づ。石堂はあれ。新。萱勝軍地藏并諸
て。丹城。凝し。初る。奇。妙。頂。禮。比。流。大。悲。深。極
の。誓。願。を。の。六。道。能。化。の。導。師。と。り。迹。以。加。持。羅。伽
山。中。に。留。り。益。と。十。方。法。界。に。施。し。釋。尊。の。遺。囑。と。切
利。天。宮。に。受。り。無。佛。世。界。の。教。主。な。り。毎。日。晨。朝。に。恒。河

沙すな小入こいり。可度うごの群類ぐんるいと觀察くわんさつ。六環ろくわんの金錫きんせきと功德くどくと
振ちく重垢ちゆうこと抜ぬく一顆いつかくの摩尼まにの萬物ばんぶつを西せいく。匱乏きんぱつと救きうひ。
無量劫むりやうけつと経けいくも。濟度じど利生りせい應驗おうげん化導けだう究きうりとする。繫けい
光幸くわうきやう小佛縁ぶつえんありて。祖父そふ繫けい氏しの菩薩ぼさつの祈いのち子しありて。二
世にせの心願しんげん以もつて遂亡すいじやう父氏ふし助すけと。不思議ふしぎの冥助めいすけ以もつて東管とうくわん
近後きんごの士しとありしより。今いま繫けい光くわう小至せうしく。忠義ちゆうぎを存ぞんせられたの
と云いふ。この身み薄命はくめい小係こけいりく。蝸かきの慮りよとら。ひ忽地いっしやくち燕えんの
古巢こさう小赴せうしく。正せい小是せい祖先そぜんの墳墓ふんぼ父母ふぼの御堂ごどう小對せうたいりて。小
面おもてなり。仰願おうえんく。の靈驗れいげんと世よ小およぼ。由基よしもある。難なん



と子こ彼か鈴すずと射いりして。ぬきび家いへと母ははとありて。肝膽かんたん
と推おしく初念しよねんして野の小拵せうじゆ山やま小拵せうじゆりて。射いりて。射いりて。射いりて。
と云いふ。既すで小至せうし年ねんの月日げつじつと経けいり。時ときは元久元年げんきうげんねん五月ごがつの半なか
小繫けい光くわうの荊萱しゆげんの関せきのところ。水城すいじやうのほとり小符ふせん。稚菰しよこも
の中なか小入こいりる。折おりも。よと泣なく堤つゝと過すり。のありき。と云いふ。
何なにもと瞻せんり。れ。年ねん紀き五十ごじゆよりある男おとこと。十七じち八はちがれ女子むすめと。
二人ふたり打うちつれ。と云いふ。堤つゝ小停と立た彼男かのおとこ潜然せんぜんとして。り。ち。り。の。打うち
惜おしや。それもし。み。へ。由緒よしあり。の。ひ。れ。小。身上しんじやう衰しやうく。人の
爲ため小腰こゝしと折おり。の。も。な。り。づ。ら。る。金かね小。追おり。て。只ただ一人ひとりの



五輪草子

七三



志げ光
竊聴
身と賣
女と憐む

三十一

救ふぞしといふこそ。彼權七の前年老死く。その子權藤六といふの千引とある。頻に娶らんとすれども僕親子寛の家小縁一締人子と肯せども彼亦この流媒なり。千引と妻小なりとあり。金の數の如く貸ふ。火急の難儀。救へといふせられど。樽友六が公のまのよきねる。父の情せも勝り。笑の中。小刀をかく。そのよ。や非命の死。或ることも。勝母の里。小入り。盗泉を飲。と。い。先。と。別。小令のそ。あ。ふ。た。し。す。も。あ。と。小。千。引。と。伴。く。博。多。の。娼。家。と。行。あ。く。い。と。詰。も。も。面。目。な。び。も。り。藪。光。つ。く。け。て。深。

く。嗟。嘆。し。つ。れ。連。續。し。く。の。地。の。領。主。あ。ん。あ。ん。さ。る。癖。者。と。烈。明。し。く。汝。が。寛。が。雪。め。ひ。き。と。べ。れ。と。今。の。新。恩。の。所。領。あ。え。と。な。れ。か。く。流。浪。の。身。あ。い。あ。れ。が。ら。ん。こ。と。を。力。あ。よ。ぐ。杯。目。前。の。難。儀。を。救。つ。ま。ん。も。の。も。と。し。い。つ。を。り。れ。金。あ。ら。ば。女。兒。を。賣。つ。て。その。ま。つ。ら。あ。べ。と。官。の。丹。助。さ。え。欲。さ。る。と。あ。の。今。の。十五。兩。あり。と。い。ふ。藪。光。點。頭。し。つ。れ。幸。あ。い。ま。と。路。銀。小。多。し。の。い。ま。今。その。金。を。と。り。ま。つ。た。ふ。が。海。も。小。多。よ。と。い。ひ。つ。け。先。小。さ。さ。み。室。満。山。ふ。り。ゆ。け。の。丹。助。親。子。の。飲。び。め。ひ。る。ぐ。な。は。半。信。半。疑。と。その。眼。あ。げ。さ。て。その。人。の。旅。宿。

お到りなれば、藤原光光もあはれと頭をうら悼む。いふこゝに、
お丹助もあはれと申す。さういふに、
お千引と申す人、孝を感ずるのあり。この庇をうける女子
も、氏にたも貴ぶ事あり。一たびその身と千萬人おまほ
す。何をりて、後の栄成をうべし。さういふの命をりて、村長
か阿責を脱しよと説諭せ。親子の愛をいひ、さういふこと
数回件の金と押戴し。不覚お落涙あつたり。お丹助は、
て丹助といふ中、良お君は、親子の爲お再生の恩人なり。
兄とて、さういふこといひ、お丹助と申す。お丹助は、
かきせと、枕の塵をうらへし。聊高恩お報ひなせ。この事、
お丹助は、お丹助と申す。お丹助は、お丹助と申す。

お丹助といふことを藤原光光もあはれと頭をうら悼む。いふこゝに、
お丹助もあはれと申す。さういふに、
お千引と申す人、孝を感ずるのあり。この庇をうける女子
も、氏にたも貴ぶ事あり。一たびその身と千萬人おまほ
す。何をりて、後の栄成をうべし。さういふの命をりて、村長
か阿責を脱しよと説諭せ。親子の愛をいひ、さういふこと
数回件の金と押戴し。不覚お落涙あつたり。お丹助は、
て丹助といふ中、良お君は、親子の爲お再生の恩人なり。
兄とて、さういふこといひ、お丹助と申す。お丹助は、
かきせと、枕の塵をうらへし。聊高恩お報ひなせ。この事、
お丹助は、お丹助と申す。お丹助は、お丹助と申す。

由緒ある君の妾とあるんこそ。大なる喜びなれ。そのゆゑに
ものねは。金も又受がしとしりぬ。あれども藤光が
従のぞ。人の欲せざればと強ひ好意ふあふと。あつらひ
あも多言し。これと苦ることなれといふ。丹助もせんさへ
なく。厚くよろこび謝す。親子古賀村小立入りの年貢未
進と残りなく償ひ。是よりをりく藤光と訪ふ。當國の
名産練酒。松露あふと贈りたり。かくて水無月の夕下り
に。ある日繁光ハ。水城の西小松山をたふ夏の日あふひ
を。連山雲を吐く。更ふ奇峯を操り。立さす。あつて霹
靂

いり鳴り。雨衣入り。遠く山を走り下り
麓なる伏屋の簷下小立在。携はれ弓矢を壁ふ。せうけ
く。あが。暗間をすらし。主入窓より。に覗く。この
人。うも。あまのな。こ。子。も。出。く。恩人を迎
叫びて。走り出。り。の。奴。え。と。れ。丹助も。千引も。連忙て。出迎
ふ。よ。も。訪。せ。ま。ひ。と。り。な。り。裡。小。誘。引。を。藤。光。を
あ。ひ。の。け。福。バ。こ。漫。たり。さて。い。汝。お。家。あ。り。ち。れ。て
り。あ。ふ。く。推。辞。こ。と。奴。も。と。伴。息。と。窓。の。下。小。立。入。親
子。の。こ。つ。る。庇。下。の。塵。入。と。え。べ。と。れ。と。款。待。し。玉。鳴

の年魚のちり焼ふ博多の練酒と汲りく出くこれとて
 四表ハ表の物ぢりふひらた夏の日も暮ひんとて
 と別を土屋に立入りんとて親子ハ叮嚀ふとめ
 携たる袖をさるさもせめく今宵一夜をわたり明したまふ
 いふその志も然止ざれば藪光已て眠ひと止宿一夜とい
 く深く対房ふ入ふ千引ハ枕方ふまのり團扇をりて蚊を
 追ひり。藪光との形容をえく首と擡とらふとてく
 く職らふとといふ千引いしとてく一団扇と面あ
 めてつ。いゆる日父の中つるすげ引もりねど。こぶの賤と

小羞くうみちる中ふあふゆと女子ハ一ひよと人あ
 へ。更ハ他人ふ入えどとて。く既あ才と君ふゆしく容れ
 ぶといふも。別小縁ふを求むた公なり。加之漆川權藤六
 あぐく媒をりしつとれもうりたふ。又いふる夏と計較て
 追ふももとうりかじし。や一夜のまひやハけいどとて今宵
 の志もふく小あうくその志を致し。今より君が傷室と稱
 されたるハ。くはわいあふ才。縦權藤六よりあてとも。
 めーあは女子といふせん。父もこのゆがあふあふ。あふ
 けりぬ。が家貧く。蝙蝠垂く。不及ねハ。せめく。通宵蚊と



蕨光
 雨せう
 物さび
 えりさ
 丹助子別
 子あふ

追ひつかつてはふとそとに物いひまよも田舎人ふいけり
 て。貌こそ賤の女子あれ顔色よく艶麗ふその性も又伶俐く
 けれ。紫光頻ふ感激し。かくして身を推辞バ志と破る
 似たり。これ只汝が生涯をややとせどして強面かりはるの
 をこり千引のいとうれしきまきさく。君が一夜の情あ百年
 の命もいと惜まふ。といふ憎くもおぼえ。やをみ
 枕ふれせり。さて天も明あけき。丹助ハ千引と呼び起して
 り。湯もに飯を炊く早膳をよめぬ。び九献を酌し替
 縁のひまねびとつと。そのとれた紫光ハ丹助千引ふりや。

これこの曉の夢ハ。年暮信トよれ石堂ハカ地蔵井吉
 宣く。射藝既ハ熟せり。そ中ハ鎌倉ハ立帰る。射
 到る。そとより。り。そふあハ大なる禍あぶ。と告ぐ。あ
 え。そ。これ元々。故ハ箇様。この。り
 と。鶴岡社頭なる。銀杏の杪ハ懸り。黄金の鈴と
 村。し。越度よ。頼家卿の。と。所領と没
 収せられ。その志。果。人。本國ハ赴。父祖の
 おは。して。苜蓿地蔵と祈念し。この二年ハほど。射藝と誓
 言。これ首尾を審ふ物。これハ千引ハこれと。或

或はらうらほく。君一むびの地と去り。その年、
 人々信ん。孰くハ何すれ再會の信不遺し。久し。縦く年
 あらじ。も操節を破る。信んじ。といハ。丹助も。其も。ふ。の
 り。も。己より。され。福ふ。蘇光。黙止。とく。とん。と。服。より
 二條の征矢を抜出し。とれ。バ。が。祖父。蘇氏。入道。総角。の。こ。は
 射る。れ。多。ひ。つ。れ。り。の。少。く。神。指。の。下。小。朱。と。り。く。加。藤。石。堂。九
 と。彫。著。り。の。矢。只。四。條。宝。満。山。小。あり。し。ふ。住。持。と。も。は
 秘。藏。と。い。ふ。も。今。親。子。が。志。の。切。り。ら。ふ。電。く。二。條。に
 ころ。ち。預。り。あり。と。れ。り。志。と。得。バ。縁。由。と。妻。桂。江。小。と。書。て

汝親子を呼ひ。又志を遂ることあり。再會更
 量。か。じ。も。あ。ら。び。も。恨。こ。と。あり。久。し。後。ふ。あ。は。音。兼
 ろ。く。ハ。人。小。塚。ア。く。刃。の。落。忌。を。な。り。ゆ。と。は。え。お。え。て。か。こ
 ころ。紙。ふ。

か。る。や。の。関。守。小。の。こ。え。を。つ。る。ハ。人。も。ゆ。さ。ね。及。べ。し。り
 と。一。首。の。古。奇。を。書。あ。り。件。の。矢。不。結。び。と。く。と。れ。と。あ。り
 不。違。ふ。し。つ。別。決。し。と。立。女。れ。バ。千。別。ハ。さ。ら。な。り。丹。助。と。い。と
 名。残。を。い。ふ。も。一日。の。運。苗。あ。れ。と。て。町。寧。ふ。苗。と
 とも。地。藏。井。の。應。驗。あ。れ。と。志。り。も。跡。踏。と。い。ふ。と。回

mr

野津保太郎



空しくいそがしく宝満山ふつり。住持も如此くの由を
告一包の金子をめぐめ。年暮の謝物と。亦蒔萱地蔵
小糸詣し。あほゆくさ急の冥助祈念。俄頃不行
装を脱ぎ。東路投し。幾足とれ。亦助の路四五里
裸送りゆき涙を流し別れり。



